

日本語・ペルシア語間の翻訳における重訳の影響

敬語表現を対象に

Gharakhani Fatemeh

1. はじめに

1.1 研究の背景

翻訳とは、ある言語のメッセージを別の言語のもとに移す行為ないしその方法である。出発点の言語を起点言語(Source Language : SL)、移行先の言語を目標言語(Target Language : TL)という。起点言語の概念と目標言語の概念との間には一対一に対応しない場合や対応そのものが存在しない場合が多いため、それらをどの方略で翻訳するのかが問題となる。筆者の経験からみても、辞書に記載されていない語や自国語に存在しない語をどう訳せばいいかと苦慮することが多い。また、日本文学に関心を持つ筆者は、日本語の文学作品の原文のみならず、勉強のためペルシア語訳を読むことも多く、そうした折には原文の日本語を想像しながら、ペルシア語の訳を読む。その際、適切な訳と感じる部分や訳の脱落が疑われる箇所、更には、原文は何だったのか思いつかない場合も多い。その理由の一つとして、特に日本語の文学作品の場合、ほとんどが媒介語(英語やフランス語)を通してペルシア語に翻訳されたこと(すなわち重訳)が挙げられるように思われる。なかでも敬語表現は、日本語並びにペルシア語の両方に存在しているにもかかわらず、媒介語を経たために抜け落ちてしまうという残念な状況が目につく。こうした自身の経験から、筆者は日本語の小説がどのように、ペルシア語に翻訳されるか、また重訳がどのように影響を与えるかに興味を持つようになった。

1.2 研究の目的と重要性

本研究は記述的な研究である。起点言語の日本語が第一の目標言語の英語を通して第二の目標言語のペルシア語に翻訳されるときに、日本語における敬語表現が重訳を通してどのようなペルシア語になっているかを把握し、またその的確性を調べることを目的とする。更に、例として採り上げた文を筆者自身が直接日本語からペルシア語に翻訳し、そのペルシア語訳文と、英語を通して翻訳されたペルシア語訳文を比較することにより、重訳の影響の検討を試みる。

2. 重訳

重訳とは、翻訳された訳文を別の言語に翻訳することであるが、時には再翻訳の一部とみなされる場合もある。ペイカー(2013)は重訳をさらに間接翻訳(indirect translation)と補助翻訳(support translation)とに区別することを提案した。彼は、間接翻訳は出版目的ではなく次の翻訳の足掛かりでしかないとし、一方補助翻訳を新たに翻訳する際に既訳を参考にすることであるとし、後者は再翻訳である点が前者と相違すると述べている(ペイカー 2013: 180)。

3. 研究方法

3.1 研究対象

本研究における分析対象には文学作品の小説を選んだ。その理由は、他のジャンルと比較すると、小説においては敬語表現など翻訳しにくい文化的な要因が数多く含まれているため、翻訳に問題が生じる可能性があるからである。

日本語から直接ペルシア語に翻訳されている文学作品は非常に少なく、しかも俳句などに限られている。しかし、英語やフランス語などを通してペルシア語に翻訳された日本の小説は少なくない。ただし、日本語の文学作品のペルシア語訳書の大半において、直接翻訳されていないことは明示されない。

本稿では川端康成の『掌の小説』とその英語訳とペルシア語訳を対象として分析を行う。この作品を選んだ理由は以下の通りである。まず、川端はイランにおいて、ノーベル文学賞を受賞した最初の日本の小説家として有名であり、テヘラン大学日本語・日本文学科の

文学の授業においてその作品が教材として多く採用されている。また、『掌の小説』は多くの短い小説からなるため、様々な話題と多様な雰囲気が提供される。

3.2 分析方法

本研究が取り扱う重訳においては、起点言語(SL)で書かれた日本語の原文が、まず、英語(English Language: EL)に翻訳され、その英語文がさらにペルシア語(Persian Language: PL)に翻訳される。

まず SL として起点となる日本語文を提示する。ついで EL として、この日本語文の英語訳を示す。次に記される PL は、その英語文のペルシア語訳である。PL については、読者の便宜のため言語学上の慣例に倣い、正字法を現代綴りの方針に従ってローマ字化した。さらに、最初の SL の持つ意味が PL ではどのように変化したかを比較できるように、吉枝(2013)を参考に形態素分析を記し、筆者による PL の日本語訳を付加した。また、同じ日本語文を筆者が直接ペルシア語に翻訳した文を併記することにより、重訳による影響を検討する。

4. 敬語表現

4.1 日本語における敬語の定義

敬語とは同じ事柄を述べるのに、述べ方を変えることによって「敬意」あるいは「丁寧さ」を表すために用いられる表現だとされる。

国立国語研究所の説明によれば、「敬語とは何かについて、定義的に述べることは難しいが、最も簡単に言えば、〈話し手と聞き手との社会的・心理的へだたりの度合いを軸にして、素材の内容や状況に配慮しながら変える、話し手の言語行動と言語形式〉ということになる」(国立国語研究所 1990: 2)と述べる。

一方、滝浦は敬語を語用論的な観点から「相対敬語としての日本語のシステムでは、敬語の使用及び不使用を決める〈視点〉の位置が決定的である」として、以下のように述べている。「視点を話し手から切り離し、そこから見える人間関係を〈距離〉の関係として表現する。その距離は量的なものではなく、関与する諸人物を“ウチ”的な関係と“ソト”的な関係とに振り分ける線引きの仕方において表現される。つまり、敬語の使用は対象人物がソト的な関係の中におかれることを表示するのであり、それゆえ、ある人物に敬語を用

いることは、他のウチ関係におかれた人物に敬語を用いないこととつねに表裏をなす。」(滝浦 2005 : x-xi)

「敬語表現」とは敬語を使った表現のことであり、話者間の社会的階層、社会的地位の差、年齢の差、文化的要素、相手との心理的距離感等が反映され、それぞれの言語において様々な形で表現される。ときに敬語は、敬意を表すための敬意表現と同様であると誤解される場合もある。しかし、国語審議会の答申によれば「敬意表現」とは、「コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである」と定義される(2006 : 125, 143-144)。本稿で対象とするのは、日本語とペルシア語の間の敬語表現の対応であり、かならずしも敬意表現ではないことに注意を促しておく。

日本語の敬語をモダリティと捉えるか否かは、研究者によって見解が異なる。滝浦(2011 : 232)は、敬語において主観性は敬語の待遇的意味と関わる話し手の裁量であり、待遇的意味を命題と対になった伝達度、すなわちモダリティの一種と考えるのはもっともなことであると主張する。また、Ide(2012 : 123)は、日本語におけるモダリティは、会話参加者の相対的立場や心理的距離ならびに場面に応じた形式を認定すると述べており、この観点からは敬語はモダリティの範疇に属すると考えられる。本稿では滝浦(2011)及び Ide(2012)と見解を共有し、その視点から分析を行う。

4.2 言語間における敬語形式の異同

本論文で考察の対象とする日本語(SL)、英語(EL)ならびにペルシア語(PL)においては、敬語はどのような形式で表現されるのであろうか。

アーザルパランドはペルシア語には尊敬語・謙譲語が存在し、日本語と同様に組織的に整備された体系的な敬語表現があり、さらに日本語と共通する尊敬を表現する特定の動詞も存在すると主張した(アーザルパランド 2008 : 451, 455)。

日本語とペルシア語の「敬語表現」には、「言材としての敬語」、「語句としての敬語」、ならびに敬語専用の文法要素及び言語要素を有するという共通点が存在する。言材としての敬語とは、具体的な「人間関係」や「場」の条件などを伴った「敬語表現」とは切り離して捉えることができる「抽象的な意味での敬語」である。「人間関係」や「場」の条件を伴った実際の「敬語表現」の中で用いられている段階での敬語は「語句としての敬語」と言われる

(蒲谷 1998: 24)。従って、ペルシア語は日本語と同様に形態論的・統語論的に体系的な敬語表現のある言語に属すると捉えることができよう。

ただし、日本語とペルシア語の「敬語表現」には、次に論じるような相違点も存在する。日本語の敬語表現は、一般に尊敬表現、謙讓表現、丁寧表現、丁寧表現、美化表現の五種に分類される。一方、ペルシア語においては、アーザルバランド(2010: 48, 54)が指摘するように、敬語表現などに対する固定した名称は存在しない。また、ペルシア語の敬語表現における尊敬表現、謙讓表現は日本語とほぼ同様に体系化されている。しかし、ペルシア語においては、丁寧表現や美化表現は体系化されず、こうした表現に類似するニュアンスを伝えるためには、婉曲表現が使用される。母語話者としての著者の感覚では、ペルシア語における謙讓表現は日本語と比較すると少数であると推定される。また、吉枝(1998)が行った調査の結果によると、ペルシア語においては女性は男性より丁寧な敬語を多く使用するが、謙讓語表現については男性の方が使用頻度が高く、女性が自身をへりくだるよりも尊敬表現によって上下関係を表示するのは基盤となっているようである。

一方、英語に関しては、南は英語には敬語表現が全くないとは言えず、各種の敬語表現の例を挙げることができると述べた。ただし、英語には日本語のような敬語の専用要素は少なく、一般的な言語要素の組み合わせによって、様々な話し手の敬語的顧慮を表す(南 1987: 44)。言い換えれば、英語では主に語用論的レベルで敬意が表現されるが、こうした表現は国語審議会の答申における「敬意表現」の範疇に属すると考えられる。

5. 分析と考察

こうした視点から、日本語における尊敬語・謙讓語のペルシア語への翻訳はさほど困難ではないと思われる。この点に関しては、筆者自身が日本語例文から直接翻訳したペルシア語文を分析することにより検証する。一方、日本語とペルシア語の間の上記の共通点は日本語と英語、また英語とペルシア語との間にはほとんど見られない。従って、日本語における敬語表現が、英語を経由してどのようにペルシア語に伝達されるかは興味深い。以下に具体的な例を挙げ、3. 2. で述べた手法による分析の結果を示す。なお、敬語表現はジェンダーと密接な結びつきがあるのは当然ではあるが、本研究においてはジェンダーを念頭に置いて検証する余地はないため、この点は今後の課題とする。

(1) [SL] どんなに一目会いたがっておりましたことか。(69)

[EL] Oh, how she wanted to see you once more. (28)

[PL] nemidunī čeqadr dust dāšt ye bār dīge

知る.NEG IND.PRES.2SG どんなに 好む.IND.PAST.3SG もう一回

bebīnad-et. (27)

見る.IND.SUBJ.PRES.3SG-PRON.SUF.2SG

➤ どんなにもう一度君に会いたがっていたか、知らないでしょう。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

I. čeqadr dust dāšt šomā ro bebīne.

どんなに 好む.IND.PAST.3SG あなた.2PL.PRON POSTP 見る.IND.SUBJ.3SG

➤ どんなにあなたに会いたがっていましたことか。

SLにおける「会いたがっておりました」という表現に含まれる「おりました」は「いる」の謙譲語である。この表現は「she wanted to see you」とELに翻訳され、主語や目的語が付加されたことによって具体化された。同様にELからPLへは「dust dāšt bebīnad-et (君に会いたがっていた)」と翻訳され、このプロセスにおいて主語が省略された。PL訳文においてSLの命題が翻訳されているが、謙譲のモダリティまで伝達しきれていない。

筆者による直接日本語からペルシア語に翻訳された文においては、相手に対する敬意を表すために、通常相手に対して使用される単数二人称代名詞の変わりに複数二人称代名詞が使用されることによって、尊敬の意が表された。日本語における「～ておる」という謙譲語動詞はPLには存在しないため、SL文におけるような動詞の変更によって謙譲を表現することは不可能である。その代替策として、ペルシア語の敬語表現において最も多用される単数2、3人称代名詞の代わりに複数代名詞を用いる方法を採用して、敬意を表すことができた。その結果、EL経由のPL訳と比較して、直接SLから翻訳されたPL訳の方が、敬意がより適切に伝達されたと思われる。

(2) [SL] ごらんなすって下さい。(69)

[EL] Please come see her. (28)

[PL] lotfan biā bebīn-eš. (33)

願う.IMP.2SG 来る.IND.IMP.2SG 見る.IND.IMP.2SG-PRON.SUF.3SG

- どうぞ来て、彼女を見て下さい。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

II. 1. lotfan molâheze befarmâyid.

 お願いする ご覧になる.IND.IMP.2PL

- ご覧になって下さい。

2. lotfan bebinid-eš.

 お願いする 見る.IND.IMP.2PL-PRON.SUF.3SG

- 彼女をご覧下さい。

SLにおける「ごらんなすって下さい」という表現は敬意を表す表現であり、「なすって」は「なさって」の口語の変形である。このSLは「Please come see her」とELに具体的に翻訳されたが、このEL訳では尊敬の意が見られない。このELの表現は「lotfan biâ bebin-eš」すなわち「どうぞ来て、彼女を見て下さい」と口語の意を含め、PLに翻訳されている。このように、SLの「ごらんなすって下さい」という文は相手に対して丁寧な口語のPLの訳文となっているが、相手に対して複数二人称代名詞は使用されず、敬意は伝わらない。その理由としては、PLには尊敬語が存在するにもかかわらず、SLの原文が持つ尊敬語がELでは消失しているため、その影響を受けたPLでは尊敬語は配慮されていないと思われる。

直接SLからPLに翻訳する場合は、「lotfan molâheze befarmâyid」つまり、「ご覧になって下さい」あるいはこの文章より敬意度が低い「lotfan bebinid-eš」すなわち「彼女をごらん下さい」と言ったPL表現が使用できる。前者は、日本語と同様に特定の敬語動詞を使用することで敬意を表す方法である。一方、後者の方法では、見るという一般的な動詞の活用に際して、意味的には二人称単数である相手に対して、二人称複数動詞を用いることによって敬意を表現している。文字通りには、前者の方が正確な翻訳だと考えられる。しかし、この会話は姑と花婿の間でなされているため、前者の口調は大げさな印象を与え、この場面では後者の方が自然な翻訳として好まれると思われる。

このように、ペルシア語と日本語は同様の敬語表現を有するが、両言語における場面に応じた敬語使用には違いが見られる。そのため、SLからPLへの翻訳では、こうした相違を念頭に置いた上で、敬意の程度が若干低い表現を選択した方が好ましいと思われる。

- 言語社会 第12号 (31) 376

(4) [SL] 私お母さんと町のお医者さまへ参りますの。(205)

[EL] I'm going with my mother to the doctor's in town. (108)

[PL] dāram bā māmān-am mīram
持つ.IND.PRES.1SG PREP 母さん.PRON.SUF.IS 行く.IND.IMPF.1SG
šahr, matab-e doktor.(114)
町 診察室.EZ 医者

➤ 母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

IV. man va mādar-am mīrim
私 CONJ お母さん-PRON.SUF.1SG 行く.IND.PRES.1PL
xedmat-e āqā-ye doktor-e šahr.
面前.EZ さん.EZ 医者.EZ 町

➤ 私はお母さんと一緒に町のお医者さんに参ります。

上例の SL は第三者に対する敬語表現、話し相手に対する丁寧語である。SL の「私お母さんと町のお医者さまへ参りますの」は EL に「I'm going with my mother to the doctor's in town」と翻訳される。「参る」という「行く」の謙譲語は、この場面においては単に「行く」のではなく目上の人(医師)を訪問するという意味で使われているため、EL の「visit」という婉曲的な動詞に相当すると思われるが、ここでは「go」が使用されているため、PL 訳においてもそのモダリティは当然配慮されていない。その EL の PL 訳は「dāram ba māmān-am mīram šahr, matab-e doktor」すなわち「母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの」である。「お母さん」が「母さん」に変わるのはくだけた話し方であるが、「医者の診察室」を付加することで、文体は少し形式ばったようになったと言える。しかし、全体的に敬意のニュアンスが見られない。

三文化圏における敬語表現の差異に起因して、「私お母さんと町のお医者さまへ参りますの」という敬語を用いた SL の原文は、PL の訳文では「母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの」と変化したため、命題は翻訳されているが、モダリティは全く配慮されていない。

筆者によって翻訳された PL 文は「man va mādar-am mīrim xedmat-e āqā-ye doktor-e šahr」、すなわち「私はお母さんと一緒に町のお医者さんに参ります」であり、医者である

第三者に対する敬意が伝達されていると思われる。「参る」に相当するペルシア語の特定動詞は存在しており、知らない人と形式ばった文体で話すのは普通なので、直接翻訳の方が適切と言える。

(5) [SL] いつか安藤さんとご一緒のところを銀座でちょっとお目にかかったけな
んですが、(…)(234)

[EL] I met you once on the Ginza with Mr. Ando(…)(103)

[PL] ye bār šomā ro bā āqā-ye āndo tū gīnzā didam.

一回 あなた POSTP PREP さん.EZ 安藤 PREP 銀座 見る.IND.PAST.1SG

➤ 一回あなたを安藤さんと一緒に銀座で見ました。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

V. yek bār vaqti hamrāh-e āqā-ye āndo tū gīnzā būdid

一回 とき 一緒.EZ さん.EZ 安藤 PREP 銀座 COP.IND.PAST.2PL
barāye moddat-e kūtāhi ziyārat-etūn kardam.

のため 期間.EZ 短い.iSUF お目にかかる.IND.PAST.1SG(PRON.SUF.2PL)

➤ 一回安藤さんと一緒に銀座にいらっしゃるときに、お目にかかりました。

SLにおける「いつか安藤さんとご一緒のところを銀座でちょっとお目にかかったけな
んですが、(…)」はELに「I met you once on the Ginza with Mr. Ando(…)」と翻訳さ
れている。そのELのPL訳は「ye bār šomā ro bā āqā-ye āndo tū gīnzā didam」つまり
「一回あなたを安藤さんと一緒に銀座で見ました」である。敬意のニュアンスとしては、
単数の二人称代名詞の代わりに複数の二人称代名詞を使用した。このように、PLには
SLの原文の命題とともにモダリティも翻訳されているが、込められた敬意レベルがSL
と比べて低いと思われる。

しかし、直接SLからPLに翻訳された文は「yek bār vaqti hamrāh-e āqā-ye āndo tū
gīnzā būdid barāye moddat-e kūtāhi ziyārat-etūn kardam」つまり、「一回安藤さんと一
緒に銀座にいらっしゃるときに、お目にかかりました」と表現された。上記のように、SL
における「ご一緒」に対応する敬語がPLに存在しないため、動詞の活用の際して、語尾に
つく人称代名詞は単数二人称ではなく、複数二人称を使用した。「būdid(あなた〜でし
た)」は「tašrif dāštīd(いらっしゃいました)」よりも敬意レベルが低くて中程度だと言え

るため、日本語における「いらっしゃる」に相当すると思われる。さらに、PL には SL における「お目にかかる」という謙譲語に相当する「xedmat resīdan」という特定動詞が存在し、これは例文の場面にふさわしいため用いられている。このように、EL を通した PL 訳と比較すると、SL から直接翻訳された PL 訳は敬意をより適切に伝えていると思われる。

- (6) [SL] 浅田さんはね、私の顔が段々新吉さんに似て来るっておっしゃるのよ。(235)

[EL] Mr. Asada says I've gradually come to resemble Mr. Shinkichi.

[PL] āqā-ye āsādā mīgan dāram kam kam
 さん.EZ 浅田 言う.IND.PRES.3PL 持つ.IND.PRES.1SG 段々
 šabih-e āqā-ye šinkiči mišam.(108)
 似ている.EZ さん.EZ 新吉 になる.IND.IMPF.1SG

➤ 私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

VI. Āqā-ye Āsādā, mīfarmāyan man dāram rafte rafte
 さん.EZ 浅田 おっしゃる.IND.PRES.3PL 私 持つ.IND.PRES.1SG 段々
 šabih-e āqā-ye šinkiči mišam.
 似ている.EZ さん.EZ 新吉 になる.COP.IND.PRES.1SG

➤ 浅田さんは、私が段々新吉さんに似て来ると言っています。

SL における「浅田さんはね、私の顔が段々新吉さんに似て来るっておっしゃるのよ」という表現は「Mr. Asada says I've gradually come to resemble Mr. Shinkichi」と EL に翻訳されている。「おっしゃる」という尊敬語は「says」と EL に翻訳され、敬意が反映されていない。この EL 表現は「āqā-ye āsādā mīgan(dāram) kam kam šabih-e āqā-ye šinkiči mišam」すなわち「私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです」と PL に翻訳されている。

EL における「say」は PL において浅田さんに対する動詞につく語尾代名詞の単数三人称の代わりに複数三人称代名詞を使用して「mīgan」と翻訳されたため、敬意はある程度伝えられた。SL の原文は PL には「私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです」と訳され、命題とともにモダリティもある程度は伝達されたと思われる。

直接 SL から翻訳された PL 訳文は「Āqā-ye Āsādā mifarmāyan man dāram rafte rafte šābih-e āqā-ye šīnkiči mišam」つまり、「浅田さんは、私が段々新吉さんに似て来るとおっしゃっています」となっている。PL には、SL における「おっしゃる」に相当し敬意レベルも同等である「farmūdan」という特定動詞の敬語が存在するためほぼ原文どおりの敬意が伝達され、EL を経由した PL 訳と比較するとより、適切な翻訳となったと思われる。

(7) [SL] 私を見るんじゃないよ。この子を見ていただきたいの。(238)

[EL] don't look at me. I want you to look at this child. (106)

[PL] man-o negāh nakon. behet goftam be in bačče
私を見る.NEG IND.IMP.2SG 君に言う.IND.PAST.1SG PREP この子
negāh kon.(110)
見る.IND.IMP.2SG

➤ 私を見ないで。この子を見てと言ったでしょう。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

VII. be man negāh nakon. mīxām lotf konid
PREP 私 見る.NEG IND.IMP.2SG 欲しがる.IND.PRES.1SG 親切にする.IND.SUBJ.2PL
be in bačče negāh konid.
PREP この子 見る.IND.SUBJ.2PL

➤ 私を見ないで。この子を見ていただきたいの。

SL における「この子を見ていただきたいの」という表現は、「I want you to look at this child.」と EL に翻訳されている。「見ていただきたい」という敬語表現は EL の「I would like you to see」という語句に相当するのにもかかわらず、「I want you to look」と翻訳され、敬意が反映されなかった。その理由の一つとして、「もらう」という動詞の謙譲語である「いただく」に「～たい」が付加され、丁寧体の「です」で終わらず、普通体の形で使用されていることが挙げられる。こうした EL への翻訳に際して生じた誤解(すなわち「I want you」という語句)に起因して、PL 訳は「behet goftam be in bačče negāh kon」すなわち「この子を見てと言ったでしょう」となり、敬意の消失に加えて、命令口調となった。このように、SL における「この子を見ていただきたいの」という表現は「この子を見てと言っ

たでしょう」という PL 訳文となり、原文の意味伝達にはずれが生じ、読者に与える印象がかなり大きく異なってきた。

筆者によって直接 SL から PL に翻訳された文は「mixām lotf konīd be īn bačče negāh konīd」つまり、「この子を見ていただきたいの」と表現されている。「lotf konīd」という PL は「親切にする」という、EL における「do a favor」に相当する語であり、何かを依頼する際、その前に来る言葉によって敬意の程度が調整される。上記の SL によると、「いただく」に「～たい」がつき、「です」がついていないということで、PL 訳文における敬意の程度を少し低下させ、「lotf konīd」の前に「mixām(私は欲しい)」という動詞を使用し、SL に適合させた。このように、EL を経由した PL 訳は誤解が原因となって適切には翻訳できなかったが、SL から直接翻訳された PL 訳では、同程度の敬意を表す語が選択されており、場面上でも使用に問題がないため、適切な意味伝達がなされたと思われる。

例文(1)から(7)において、命題及びモダリティの翻訳の可否を敬語表現の視点から分析した結果、及び直接日本語からペルシア語に翻訳された訳文との比較を表 1 にまとめる。

表 1 敬語におけるメッセージ伝達の可否
(命題及びモダリティ)

	重 訳		直接翻訳	
	命 題	モダリティ	命 題	モダリティ
1	○	×	○	○
2	○	×	○	○
3	○	○	○	○
4	○	×	○	○
5	○	○	○	○
6	○	○	○	○
7	×	×	○	○

6. まとめ

敬語表現を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳への過程における変遷を調べた結果、次のような結論を得た。

分析対象とした例文 7 件の中で、SL から EL を経た PL への重訳の結果、命題と共にモダリティも翻訳された例文は 3 件[例(3), (5), (6)]である。これらの例文では、敬意は完

全に SL と同様なレベルで翻訳されているとはいえないが、ある程度まで PL 訳文に反映されている。先述のように、EL には体系的な敬語表現が存在せず、また言材としての敬語の数もきわめて限られている。そのため、EL では婉曲的な表現を使用することにより SL における敬意を伝達しようと試みられており、その雰囲気は PL 訳にも伝わっている。一方、PL においては SL と比較すると少数ではあるが敬語表現が存在し、単数第二人称代名詞を複数二人称代名詞に変え、また動詞につく語尾代名詞の形式が使用されている。

一方、PL 訳において SL の命題が翻訳されているが、敬意は捨象してしまった例文は 3 件[例(1), (2), (4)]存在している。これらの例文では、SL におけるモダリティが EL において配慮されなかったため、PL 訳においても伝達されなかった。しかしもう一つの理由として、(1)及び(4)例文には謙譲語のみが使用された点が挙げられる。4. 2. において、ペルシア語における謙譲表現は日本語と比較すると少数ではないかと述べたように、EL はもちろんのこと、PL においても日本語の謙譲語に的確に対応しうる表現が不足すると考えられる。従って、SL 文に尊敬語ともに謙譲語も存在している場合には、尊敬語に対して、単数二人称代名詞の代わりに複数二人称代名詞を使用するだけで、ある程度敬意のニュアンスが伝達可能であるが、謙譲語のみの場合は翻訳しにくいと推定される。

SL の命題とともにモダリティも抜け落ちてしまった PL 訳文は 1 件[例(7)]、であった。その理由は、EL 訳において生じた誤解により、PL 訳においてもニュアンスが大きく異なってしまったからであろう。このように、重訳によって敬語表現における意味伝達に成功した例文は半数に過ぎず、またその成功例においても SL と同様な敬意レベルでは翻訳されていない。

次に、筆者が直接 SL を PL に翻訳した訳文と、SL から EL を通して重訳された PL 訳との比較を試みる。上述のように、重訳における敬語の伝達成功率が約 5 割にとどまるのに比べ、筆者による直接訳は全例文においてモダリティの伝達に成功しているという予想通りの結果が得られた。その中で、重訳を経た結果モダリティが伝達されなかった例文(3 件[例(1), (2), (4)])もあれば、重訳を経由してもモダリティが適切に伝達された例文(3 件[例(3), (5), (6)])も存在する。重訳を経ても敬意の伝達に成功した例文では、全てのケースにおいて SL で尊敬語が使用されている。当然ながら尊敬語と謙譲語の組み合わせからなる SL の例文も存在するが、このような場合には PL に伝達されたのは尊敬語

の形のみであり、謙讓語の伝達は見られない。また、EL を経由して翻訳されたため、その尊敬語の表す敬意レベルは直接翻訳された尊敬語のレベルに達していないことは言うまでもない。一方、重訳で敬語表現が消えた例文は、SL において謙讓語が用いられているケースがほとんどであることが分かった。

その理由として、重訳の場合は媒介語である EL に SL と同様な敬語体系が存在しないため、SL から EL への翻訳に際して敬意が捨象され、それが PL 訳に反映されたことが挙げられ、この問題点は本研究によって新たに判明したと言える。

また、SL と PL の間では、敬語が使用される場面や状況により敬意レベルが異なる場合も多い。しかし、ペルシア語における謙讓表現は日本語程多くない。またペルシア語では、女性が謙讓表現を用いる頻度は男性よりも低いと言われる。そのため、SL の知識を持たない訳者が EL を PL に翻訳する場合は、特に謙讓語が配慮されない傾向がある。しかし、日本語の敬語表現を意識しながら直接 PL に翻訳する場合は、SL にそのまま相当する謙讓表現が PL には存在しない場合においても、ペルシア語が豊富に有する尊敬語などを用いることによって、上記の直接翻訳の例に見られるように SL における命題とともにモダリティも伝達しうる。この点も、本研究によって新たに解明された。

参考文献

- アーザルパランド・ソホラーブ(2008)「ペルシア語における敬語表現：素材敬語を中心に」、一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』第2号、pp. 438-456
- アーザルパランド・ソホラーブ(2010)「ペルシア語における敬語表現の研究：日本語の敬語表現の特質を視野に入れて」一橋大学大学院言語社会研究科博士論文
- 井出祥子(2006)『わきまえの語用論』、大修館書店
- 蒲谷宏、川口義一、坂本恵(1998)『敬語表現』、大修館書店
- 国立国語研究所(1990)『敬語教育の基本問題』大蔵省印刷局
- 滝浦真人(2005)『日本の敬語論——ボライトネス理論からの再検討』、大修館書店
- 滝浦真人(2011)「敬語と言語主体——敬意・主観性・モダリティ」、澤田治美編『主観性と主体性』ひつじ書房、pp. 231-249
- モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ(編)(2013)、『翻訳研究のキーワード』藤濤文子、伊原紀子、

田辺希久子訳、研究社

南不二男(1987)『敬語』岩波新書

吉枝聡子(1998)「現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究——テヘランの場合——」
(東京外国語大学博士論文)

吉枝聡子(2013)「ペルシア語の所有・存在表現」東京外国語大学『語学研究所論集』第18号 pp. 362-378

Ide, Sachiko (2012) Roots of the Wakimae Aspect of Linguistic Politeness: Modal Expressions and Japanese Sense of Self, in *Pragmaticizing Understanding*, Amsterdam: John Benjamins, 121-138

研究対象書物

SL 版：川端康成(1971)『掌の小説』、新潮文庫

EL 版：Yasunari Kawabata (2006) "Palm -of -the- Hand Stories" Lane Dunlop & J. Martin Holman, Farrar, Straus and Giroux. New York

PL 版：Yasunari Kawabata (2013) "Dastan-ha-ye kafe-dasti" mohammad reza qelich khani, *chap-e qazal*

略語

COP コピュラ

CONJ 接続詞

EZ エザーフェ

IMP 命令形

IMPF 未完了

IND 直説法

NEG 否定

PAST 過去

POSTP 後置詞

PL 複数

PREP 前置詞

PRES 現在

PRON.SUF 接尾辞形人称代名詞

SG 単数

SUF 接尾辞

REL.PRON 関係詞

SUBJ 仮定詞

(がらはーにー ふぁてめ／博士後期課程)